

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：37102

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K13079

研究課題名（和文）中世期から近世前期における平家物語にまつわる文芸領域及び文化の動態に関する研究

研究課題名（英文）Research on the Literary Domain and Cultural Dynamics of the Heike Monogatari from the Middle Ages to the Early Modern Period

研究代表者

森 誠子 (mori, satoko)

九州産業大学・基礎教育センター・准教授

研究者番号：20615356

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,800,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、『平家物語』並びにこれと題材の共通する諸文芸を同時代的・通史的に突き合わせ、平家にまつわる文芸の生成及び流布の様相を解明しようとするものである。その好適な例として『平家物語』の女性説話を切り口に、中世期から近世前期における総合的な文芸領域の様相の解明を目指した。しかし、COVID-19の影響で国内外の調査等の大幅な縮小を強いられたため、当初の計画通りに行くことはできなかった。そこで、分析するターゲットを柔軟に変更し、周辺説話の展開様相を先行研究よりさらに解明するとともに、自粛解除後に遂行できた調査により、北陸における仏御前説話の展開について新たな知見を盛り込み解明することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究成果の学術的・社会的意義は、原典としての『平家物語』からは内容及び時代的に隔たった言説が、歴史事象を伝える文芸としてどのように形成されていくのか、その生成及び流布の様相の一端を明らかにしたことである。具体的には、本文の改変が施されている後出の『平家物語』と、平家にまつわる諸文芸として、特に梓弓や畠山といった周辺説話と、北陸における仏御前説話等に注目し、それぞれの生成・変容・享受の実態と作品相互の影響関係等を同時代的・通史的に捉えながら、生成及び流布の様相の一端を解明した。加えて、COVID-19蔓延以前に訪問したNYPLでの調査結果を公表し、活動を制限された学会・社会に寄与した。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is a contemporaneous and historical comparison of The Tale of the Heike to other literary works sharing the same subject matter, and to research the circumstances by which literature concerning the Heike clan was created and distributed. Our initial objective was to survey the overall literary landscape of medieval and early modern Japan by focusing on female-centric stories in The Tale of The Heike as ideal examples. However, the COVID-19 pandemic forced us to greatly reduce the scope of the study, including domestic and foreign research, and therefore the study did not proceed as originally planned. Therefore, we opted to be flexible in our targets for analysis, and explored the development of stories peripheral to The Tale of The Heike building on past research, and then through research carried out after the lifting of pandemic restrictions, made discoveries based on new findings on the development of stories of Hotoke-gozen in the Hokuriku region.

研究分野：日本文学

キーワード：説話文学 平家物語 伝承文学 在地伝承 直談 縁起 信仰 芸能

## 1. 研究開始当初の背景

『平家物語』は、それ自体が多様な異本群を生み出し流布していただけてだけでなく、お伽草子（14～17世紀にかけて出現した短編の物語草子類。「御伽草子」「室町物語」とも称される）をはじめ、説話・寺社縁起・謡曲（能楽）・舞の本（幸若舞）・浄瑠璃・説経・絵画・地域の祭りや伝承に関わる言説等の諸文芸に、様々に享受されることで流布してきた。そのような中、これまでの『平家物語』研究は、多様かつ複雑な異本群の本文を整理することにより、諸伝本の系統に関する解明がなされてきた。特に古態性を探る研究は格段に進んでいる。だが、『平家物語』と題材の共通するお伽草子作品等は、時代が下って制作された『平家物語』諸伝本とともに、古態とされる『平家物語』本文と比べ、後出でありながらも改変部分が多い。そのため、軍記物語研究においても副次的な研究対象とされ、単純に『平家物語』から他の文芸へという影響関係の指摘で終わることが多かった。これに対し研究開始頃と同時期から、周縁の諸文芸との連続性や相互の影響関係にも着目されるようになってきており、その動向を推し進めるようにこれまで研究を重ねてきた背景があった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は当初、次のようなものであった。

「男性説話以上に、『平家物語』の一部と関係しながら多様に流布していただけてだけでなく、芸能・絵画をはじめ、地域に伝わる言説としても展開する等、様々なかたちで取り上げられている好適な例として、『平家物語』に描かれる平清盛に翻弄された女性説話を直接の原拠としたお伽草子を切り口として取り上げ、これまでに明らかとなったお伽草子の成立背景や周縁の諸文芸との関係にも着目しつつ、平清盛に翻弄された女性の物語が諸文芸においてどのように生成し流布したのか、その様相を明らかにする」

だが、2020・2021年度は、COVID-19の感染拡大の影響による勤務校からの出張禁止もしくは自粛、また政府による移動自粛の要請があったり、2022年度の特に前半では、自粛は解除されても依然として調査訪問地に対する医学的かつ心理的不安・懸念の影響があったりしたことから、分析するターゲットを柔軟に変更しつつ文献資料を中心とした研究に切り替えざるを得なくなった。そこで、本研究にも関連してくる『法華経』の「直談」という場において展開した説話に着目し、そのあり方、さらにはそれを支える知的基盤や背景を把握する言説の生成基盤の解明を、改めて目的とした。

さらに、2022年度後半から2023年度にかけては、本研究における当初計画どおりである、『平家物語』と題材の共通する女性説話、特に北陸地方を中心に伝わる仏御前説話を取り上げながら、中世期から近世前期における平家にまつわる文芸の生成及び流布の様相を明らかにすることで、歴史事象を語り伝える営為と物語の創造、それに連関する地域に伝わる言説展開の解明を目指した。

## 3. 研究の方法

本研究の方法は一貫して、『平家物語』並びにそれと題材面で共通する言説（物語草子・説話・直談・在地伝承など）を等価に並べその展開相を追究することで、中世期から近世前期における平家にまつわる文芸の生成及び流布の様相を明らかにし、歴史事象を語り伝える営為と物語の創造、それに連関する地域に伝わる言説展開の解明を目指すというものである。具体的には以下の通り。

#### (1) 『法華経』直談の場における言説展開について

これまで梓弓説話を記す文芸テキストとして研究の俎上に上ってこなかった『直談因縁集』を基軸に、入間川の水害伝承を記す『発心集』『三国伝記』との関係を明らかにすることで、歴史事象を伝える営為と文芸テキストの言説展開との一様相について明らかにするという方法を用いた。

加えて、畠山六郎重保伝承の広範囲な流布の状況を知る一助として、『直談因縁集』「草喩品」巻3第2話を取り上げ、そこに記された畠山六郎重保譚を経過点に、題材を共通する諸文芸の言説生成・流布の一端を追究することで、中世から近世前期における直談という場における説話のあり方、さらにはそれを支える知的基盤や背景を把握するための一端を明らかにするという方法を用いた。

なお、詳細は後述するが、上記はいずれも『平家物語』の周辺説話と見なし得るものである。

#### (2) 北陸地方を中心に伝わる仏御前説話の言説展開について

石川県小松市に伝わる『仏御前事蹟記』『仏御前影像略縁起』といった資料と、実地調査及び関係資料の調査を行い、関連する言説を等価に並べその展開相を追究することによって、平家にまつわる言説がどのように地域に根付き語られていったのかを検証するという方法を用いた。

### 4. 研究成果

各年度の成果は、以下の通りである。

#### 【2019年度】

多様な諸本を持ち多様な女人往生を記す『平家物語』について、諸本を俯瞰的に見ることによって、その表現特徴の一端について捉え、結果を発表した(『古典文学の常識を疑う』2019年)。また、平家にまつわる文芸テキストの展開の一様相を解明するための一助として、『平家物語』諸本に記される女人往生の言説を、人物・場面ごとに突き合わせられるようにしながら整理し報告した(『文献探究』58)。

加えて、『平家物語』応永書写延慶本をはじめ、『保元物語』の後出諸本、『太平記』諸本や、それらと同時代に成立した『三国伝記』に記される梓弓説話について、これまで梓弓説話を記す文芸テキストとして研究の俎上に上ってこなかった『直談因縁集』を基軸に、入間川の水害伝承を記す『発心集』『三国伝記』との関係を明らかにすることで、歴史事象を伝える営為と文芸テキストの言説展開との一様相を明らかにし、当該2019年度に口頭発表、翌2020年度に成文化報告した(『語文研究』129)。

#### 【2020年度】

COVID-19の感染拡大の影響により、予定していた国内外の出張が取りやめ・延期となってしまった。そこで2020年度は、前2019年度に行った梓弓説話の言説展開に関する研究成果を踏まえ(『語文研究』129)中世期から近世前期における逆修に関わる言説展開の一様態として、『直談因縁集』「草喩品」巻3第2話に記される逆修・卒塔婆、それに付随して記される畠山六郎重保の地獄破り譚にまつわる言説の生成基盤を明らかにした。具体的には、これまで詳しく掘り下げられる機会の無かった、『直談因縁集』に記された畠山六郎重保の言説についてである。当該言説は、『沙石集』に拠りながらもテーマを異にし、軍記物語諸作品及び謡曲「卒塔婆小町」等からの影響をはじめ、種々の地獄破り譚や笑話集に記

された言説、加えて畠山六郎重保にまつわる幸若舞曲や中世地方芸能と言説生成基盤を同一にしている。その交流の様態を明らかにした。

#### 【2021 年度】

前年度に引き続き COVID-19 の感染拡大の影響に起因する、勤務校からの出張禁止もしくは自粛、また政府による移動自粛の要請等により、予定していた調査のほとんどは実施できなかった。

だが、平家にまつわる文芸領域の動態を解明し、その結果として中世期から近世前期における総合的な文芸領域の様相を解明する目的で行った畠山重保伝承と法華直談についての考察がまとめ、「畠山重保伝承と法華直談 『直談因縁集』巻三第二話を中心に」として掲載することができた(『語文研究』132)。これは、畠山六郎重保伝承の広範囲な流布の状況を知る一助として、『直談因縁集』「草喩品」巻3第2話を指摘し、そこに記された畠山六郎重保譚を経過点に、中世から近世前期における言説展開を明らかにすることを以て、題材を共通する諸文芸の生成・流布の一端を追究した。結果、本研究課題の究明につなげることができた。

#### 【2022 年度】

2022 年度の前半は、昨年度に引き続き COVID-19 の影響により県を跨ぐ実地踏査が行えなかった。そのため、先年行った海外調査(ニューヨーク公共図書館スペンサーコレクション)について研究会における発表内容の補訂を行い、海外調査が不可能である状況に多少なりとも寄与できるよう、調査の経緯と結果の情報共有化として公表した(『古典遺産』71)。

2022 年度の後半は、COVID-19 にともなう種々の制限も緩和されてきたので、当初の計画を遂行すべく、北陸地方の加賀地域を中心に、『平家物語』に描かれる女性説話の一つである仏御前説話の成立と背景について、これまで COVID-19 の制限下で出来る限りの資料収集と分析を行った結果を一端整理するため、口頭発表を行った。そして、その成果をもとに、実地踏査を行った。結果、従来、藤島秀隆氏によって纏められてきた先行研究の成果をさらに前進させ、平家物語に登場する女性が、平家物語の往生譚を離れて、様々な場所で様々な往生を遂げる、種々に残された文献資料の記述の精査と実地踏査から、その成立と背景の解明に繋げることができた。

#### 【2023 年度】

5 月以降 COVID-19 が国内で 5 類に引き下げられたことで、本格的な実地踏査・成果の口頭発表及び成文化に移ることができた。具体的には、『平家物語』に描かれる女性である祇王に関わる滋賀県の野洲地域、同じく仏御前に関わる北陸地方の加賀地域、祇王・仏御前の両方に関わる福井県の越前地域での実地踏査、それと並行して文献資料の精査を行い、8 月に論文「加賀国における仏御前説話 「仏御前事蹟記」を基軸として」を公表(『伝承文学研究』72)、翌年 1 月には口頭発表「仏御前説話の地域的展開 加賀国・越前国を中心に」を行った。祇王及び仏御前説話ともに、本研究期間で新たな発見や課題も多く得られたので、今後さらに精査を重ね、結果を公表していく。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 森誠子	4. 巻 72
2. 論文標題 加賀国における仏御前説話 「仏御前事蹟記」を基軸として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 伝承文学研究	6. 最初と最後の頁 28-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 田口寛・森誠子	4. 巻 71
2. 論文標題 ニューヨーク公共図書館スペンサーコレクション調査報告 蔵書の一部に関する書誌目録稿	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 古典遺産	6. 最初と最後の頁 95-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森誠子	4. 巻 132
2. 論文標題 畠山重保伝承と法華直談－『直談因縁集』巻3第2話を中心に－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語文研究	6. 最初と最後の頁 26-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/6617889	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森誠子	4. 巻 58
2. 論文標題 『平家物語』諸本における女人往生記述を俯瞰する（付 対照表）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 文献探究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4402938	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 森誠子	4. 巻 129
2. 論文標題 「梓弓説話」変容の一過程 『直談因縁集』の水害伝承へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語文研究	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15017/4402932	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 森誠子
2. 発表標題 仏御前説話の地域的展開 加賀国・越前国を中心に
3. 学会等名 伝承文学研究会 第492回東京例会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 森誠子
2. 発表標題 加賀国における仏御前説話の成立と背景
3. 学会等名 伝承文学研究会第483回東京例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 森誠子
2. 発表標題 『直談因縁集』巻3第2話「逆修ニソトバ立ツル人ハ説法利口ノ事(地獄有無)」
3. 学会等名 伝承文学研究会第467回東京例会(オンライン開催)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 松田浩・上原作和・佐谷眞木人・佐伯孝弘 編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 256
3. 書名 古典文学の常識を疑う 縦・横・斜めから書きかえる文学史	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------